

「満系文学」と「日系文学」の交渉

—中日文学者の交遊から—

単 援 朝*

要旨

本稿は「満州国」における「満系文学」と「日系文学」の交渉を、双方の文学者の交遊を見ることによつて考察するものである。中日文学者の交遊と交流がいつ、どのような状況のもとに始まり、どのような形で展開したかを、主として中国人文学者の証言を通して、これに日本人文学者の証言を配して明らかにしつつ、交流の動機、実態、性格、位相と意義について考えている。

キーワード：満系作家、日系作家、文話会、激発扶掖、『明明』派（『芸文志』派）、『文選』派

はじめに

「満州国」で文学をする中国人と日本人は当時「満系作家」、「日系作家」、その文学は「満系文学」と「日系文学」と呼ばれていたように、「満州文学」という名のもとに締めくくられる中国人の文学と日本人の文学は基本的に異質のものである。二つの異質の文学が一体どのような関係を持ち、文学者の間にどのような交流があったかは「満州文学」を考えるうえで避けられない問題である。この問題をめぐって、すでに西原和海氏の「満州国における日中文学者

の交流」という広い視野に立つ考察がある。筆者もこの問題に関心をもつ一人で、これまで「日系作家」の間で「満系文学」の「暗さ」が問題となっていた事実に着目し、この問題をめぐる「日系作家」と「満系作家」の攻防を中心に両者の目指す文学像の異同などを検証してきた。本稿では、「満系作家」を中心とする当事者の証言により中日文学者の交遊の実態を明らかにしつつ、作家の交遊を見る視点から「満系文学」と「日系文学」の関係を再考したい。

一、「日系作家」の「激発扶掖」

西原和海氏が前掲論文で「当事者たちが、このあたりの機微を書き残してくれていれば有難かつたのですが、日本人についていえば、その種の証言は、戦中・戦後を通してほとんど見当たりません。中国人に関しては、私には細かいことは分かりませんが、似たような事情にあるかと思われます」と指摘するように、確かに当事者の証言が少ないのは問題である。だが、両者の関係に触れる発言は全くなかったわけではない。「満系文学」の代表的な作家の一人である山丁は「満州文学閑談」で「満系文学」の歩みを次のように振り返っている。満州事変まで「中国文学界で『東北文学』と呼んで

*崇城大学総合教育教授

るる「満系文学」は「事変を分水嶺として一変し」、「南満文学」と「北満文学」に分かれていた。前者より後者は活況に溢れており、「甚だ立派な作品」を多く出したが、「一九三五年以後、北満文学は毫も出色の作品がなく、甚だしく凋落してしまつた」³⁾のである。その理由は「北満文学」から出た「三郎(簫軍)、悄吟(簫紅)、洛紅(羅峰)、劉莉(戈白)、代生、巴来、黙映、金人(金人)、梅陵(孫陵)」などの作家のうち、「或る者は粘性の土地を脱け出し、括弧内の新しい筆名で国外文壇に活躍してゐる。或る者は筆を投げて『文学無用論』を唱え、或るものは閑つぶしの文章を書いてゐる」からであるが、こうした変化は、一九三六年六月の『黒龍江民報』事件で詩人金劍嘯が逮捕、殺害されたことにもうかがわれるように、実は反満抗日的な色彩を帯びる「北満文学」への官憲の弾圧が強まつた結果である。この「国外」とは北京や上海など関内の地域を指し、簫軍、簫紅を始め、危険を感じた多くの作家はそこへ脱出した。「北満文学」の「凋落」は「満系作家」を取り巻く環境の厳しさを浮き彫りにすることになるが、「多くの作家が出て行き、程なくまた多くの文学上の新進がその後を補つた」として、その後の状況について山丁はこう書いている。

現下の満系文学者について見れば、作家たち——土地に粘着する作家たちは、身近な日系作家たちの激発扶掖を受け、その作品は人類の魂の門に進み入り、濃厚な時代の氣息を蒸発するに至つてゐる、近い将来詩史のやうな作品も生まれることであらう。

(大内隆雄訳)

「土地に粘着する作家たち」はほとんど「南満文学」から出た作家で、具体的に「秋蛩(秋蛩)、夢園(小松)、驥弟(金音)、洗園(勵行建)、孟素(孟素)、劉佩(爵青)、靈非(未名)、吠影(田兵)、成雪竹(成弦)、文泉(石重)、石亭(陳因)等」の名が挙げられている。彼らが「北満文学」の「凋落」という厳しい現実に直

面しながら、満州の地に残つて「東北文学」の流れを汲む文学活動を展開していくことを、山丁が希望をこめた筆触で書き記している。そのなかで、「作家たちは、身近な日系作家たちの激発扶掖を受け」ているという指摘に注目したい。どこまで本気なのかは定かではないが、「満系文学」の歩みを反省的に振り返る文章で、しかも中国語で書かれているので、特に「日系作家」を意識して執筆されたものではないといえる。この「激発」と「扶掖」ということは、恐らく原文にそのまま用いられているものだろう。日本語にもあるものとして、訳者がそのまま援用したのだと考えられる。ただ、前者について、日本語と中国語では意味がずれており、「激しく起る」(日本語)というより、「かき立てる、発奮させる」(中国語)という意で用いられていると思う。「日系作家」との関係は二つのことばによって端的に示されている。要するに、「満系作家」とつて、動機はともかくとして、「身近な日系作家たち」の激発、扶助は満州の地で文学活動を続けていく上で欠かせないもの、文壇において主導的立場を占める「日系作家」との付き合いは避けられぬ課題となるのである。

「身近な日系作家たちの激発扶掖」について自らの体験を踏まえて語るのは、爵青の「日満系作家の交遊」である。「満系作家」の間に「日系作家」との交遊が敬遠される傾向があったので、『芸文』第一巻第一号(満州芸文連盟版一月創刊号、康德一一(一九四四)年一月)に発表されたこの一文は、「満系作家」の証言として極めて貴重なものである。なお、文章は日本語で書かれている以上、いうまでもなく日本人の読者を意識しているが、そのテーマが編集部から与えられたものという可能性も排除できない。

そもそも掲載誌の『芸文』は小原克己が社長を務める芸文社の出す月刊誌で、「満州唯一の日本語総合文化誌」として売り出されていたのである。しかし、一九四四年一月から満州芸文連盟が芸文社

から誌名を譲り受ける形で、『芸文』は満州芸文連盟の機関誌として再出発することとなった。再出発にあたって、『満州国唯一の純芸文綜合雑誌』（『満州藝文通信』康徳一〇年一〇月号）と位置づけられていた。一方、芸文社は自らの社名を満州公論社に改名し、『芸文』を『満州公論』と改題して雑誌の刊行を続けていた。これとほぼ同じ時期に、芸文書房から刊行される『芸文志』という中国語の文芸誌も満州芸文連盟の機関誌となつて再出発することとなった。満州芸文連盟という組織の強化につながるこうした一連の動きの背後に国務院弘報処の存在があつた。弘報処の狙いは、前掲『満州藝文通信』に「政府の藝文に対する厚き関心」云々とあるように、戦時下における国内の文化統制の強化にほかならなかつた。こうした使命を背負つて再出発する『芸文』の成功に勿論「満系作家」の協力が欠かせないし、一方、「芸文家の動員」は決戦体制下における満州芸文連盟の抱えている課題の一つである。爵青の一文はこのような状況のもとに掲載されたのである。なお、「満系作家」の作品として、一月創刊号に疑遅の「寒流」という小説も大内隆雄訳で掲載されている。

当時満州芸文家協会の委員を務めている爵青は、「日系作家」との交遊に積極的だつた作家の一人であり、かつ日本語で作品を多く書いている。日本語による作品の数は、『芸文』に限つてみれば、「満系作家」の中で最も多く、古丁のそれを上回っている。この意味で、彼は「日満系作家の交遊」を語る作家としてふさわしいといえる。ただ、敏感な話題のせいなのか、具体的に作家の交遊を語る部分はそう多くなく、かなりの部分は抽象的な作家論が占めている。文章のテーマがいかにかに難しいものか、このような内容の構成からもうかがわれる。

文章は作家論に始まる。作家の「文人気質」は政治家や町人の気質と違って多種多様であるが、本当の交遊は「各自の気質の触合は

せ」である。しかし、「満州にゐる日満系作家の間には、まだそれ程の交遊は行はれてゐない」。それは「職業作家はまだ少ないからであり、アマチュア作家の文人気質はやはり職業作家のそれと異なる。従つて、「いままで日満系作家の間にはある種の交遊こそあつたが、まだ純粹の作家同士の交遊はな」という。「純粹の作家同士の交遊」に対して「半ば常人的な附合ひ」ということばを使つているところに留意したい。これまでの「ある種の交遊」は後者だつたのである。

日満系作家は何時から交遊し始めたか、僕は比較的遅く新京に出てきたものだからよく解らない。多分康徳四年頃からだと思ふ。その時文話会は大連から新京に移され、満系作家が続々それに加入し始めてから、双方の附合ひがだんだん頻繁になつたかの様に覚えてゐる。

爵青から見れば、中日文学者の交遊に重要な役割を果たしたのは文話会である。満州文話会は関東州及び「満州国」に住む日系文化人によつて作られた団体であり、一九三七（康徳四）年六月大連で創設され、同時に奉天、新京に支部が設けられる。「在野の文化綜合団体」として活動をしていたが、「やはり政府の肝煎りでできてゐたもので、日満系の知識人を広く糾合した一種の文化的友好機関だつた」のである。但し、文話会の本部が大連から新京に移されたのは二年後の三九年八月のことなので、「その時文話会は大連から新京に移され」たとは爵青の記憶間違いで、正しくは彼の文中にもあるように「文話会の新京進出」である。彼自身を含む「満系作家が続々」加入したのは新京支部であり、これは爵青が新京支部文芸幹事だつたことにも裏付けられる。四一年、政府による文化統制の強化につれて、文話会は政府・弘報処からの圧力で解散され、その生まれ変わりとして満州芸文家協会が作られ、これはさらに満州芸文連盟に改組されるのである。満州芸文連盟は、浅見淵によれば

「満州国弘報処が公示した芸文指導要綱に拠って設立したもので、その第一の使命は（中略）大戦協力にある」というように、半ば官製の国策団体である。従って、爵青にとつて、「日系作家」との交遊は文話会入会時に始まったのだが、こうした経験はすべての「満系作家」にあてはまらず、実は文話会は最初から多くの「満系作家」に敬遠されたのである。

二、「満系作家」と文話会

一九三七年三月、古丁、疑遲、外文らは日本人の資金援助を受けて雑誌『明明』を創刊した。総合誌として出発した『明明』は六号から純文芸の月刊誌となり、同人以外の「満系作家」の作品も多く掲載した。これが一九三八年九月に停刊した後、一部の同人は翌年一〇月に「芸文志事務会」を作り、後身である季刊誌『芸文志』を出した。『芸文志』によく寄稿したのは古丁、疑遲、外文、爵青、辛嘉、張辛実、杜白雨らの作家。戦後の回想の中で、北川謙次郎は『芸文志』の創刊披露会での次のような出来事を書き記している。宴半ばにして日系作家の一人が立ち、彼ら満系作家も文話会へ入会して欲しい旨の発言をした。それにたいして、これまた満系作家の一人が立つて答えた。当時の筆者の記録があるから、その答弁の要旨を引いてみる。

「文話会に加入を勧められたといふことは嬉しいことであるが、自分たちがすでに文学そのものをさえしばらく避け、官吏として、会社員としての生活に没頭したいと考えてゐる際なので、出来るだけそういった会合に顔を出したくないといふのが、正直な気持ちである。その点、諒解していただきたい。」⁶⁾

「日系作家」による文話会への入会勧誘はある意味で、「日系作家たちの激発扶掖」とも捉えられるが、その場でこれを断った「満

系作家」はまさに「筆を投げて『文学無用論』を唱え」る立場にあるといえる。この印象的な一齣に触れて、北村は「彼らは、今となつても、張政権時代と同じように（或いはもつと古い時代からのしきたり通りに）政治的圧迫を避けたいあまりに、文学者としての外貌を捨てるどころか、いつさいそのような空気を忌避し、善良な官吏、会社員として終始したい願いをもちつづけていたというのは、少し考えれば、すぐに理解のいくことでもあつたのだ」と理解を示すが、「政治的圧迫」への恐怖のみでなく、文話会への入会を拒んだのは彼らの心底に「満州国」を立ち上げた日本及び日本人への不信感が潜んでいるからであろう。北村の述懐に『建国文学』とか『協和文学』とかいつても、彼らにはとうてい眉唾ものの感がぬけなかつたろうし、『文話会入会』にいたつては、そんなことが知られたら、どんな目に会うかという危惧の方が大きかつたろう（同前）とあるように、文学理念の共有ができないということに加えて、彼らにとつて、文話会という組織はあくまで体制側のものであり、入会拒否は体制側と距離を置くことになる。従つて、筆を投げる覚悟で入会を拒否するのは一種の保身術であると同時に、一種の抵抗と受け止めてもいいように思う。このように、体制内に組み込まれることを嫌がり、文話会と距離を置こうとする「満系作家」も少なくなかつた。近年、作家金湯（田兵）は研究者の訪問を受け、爵青について次のように述べている。

一九四〇年文話会大会が開かれる。当時、私は奉天で『作風』、関沫南は北満で『大北風』の編集に携わっていたが、私たち二人は彼らによつて長春に呼び出され、大会に列席するように要求された。二人とも文話会の会員でなかつたため、文話会のバッジをつけずに会場へ向かつたが、入口で爵青に止められ、「さつさとバッジをつけなさい」と怒つた口調で言われた。会員でない事情を説明したら、彼は会員でなくてもいまは会員、参加する気はな

くても参加せざるを得ないから、バツジをつけないと駄目なんだ。さもないと面倒なことになると言った。⁽⁸⁾

これについて、訪問者の劉曉麗氏は「爵青の発言は田兵にとって大事なことで、彼はこれで禍を免れたとでもいえよう」とする。田兵は『明明』によく寄稿した作家で、古丁、爵青らと近い関係にあり、発言中の「彼ら」は二人を指す。田兵の回想も文話会に対する「満系作家」の温度差を浮き彫りにする。確かに、爵青の言動に神経質になっているところがある。「面倒なことになる」のは主に文話会や「日系作家」との関係においてだろうと推察される。このことに必要以上神経を尖らせたのはその関係において弱い立場にあるからである。従って、「参加する気はなくても参加せざるを得ない」という一言は、文話会役人（新京支部文芸幹事）の立場からの発言というより、「満州国」で文学をする一「満人作家」の諦観と受け止めたほうがよいと思う。諦観といえば、筆を投げるまで文話会への入会を拒否する作家たちの選択も一種の諦観といえるが、文話会への入会を拒まなかった古丁、爵青らのそれは異なる方向に向かっている。作品を書き、発表することを何よりも優先させるべきだという「写印主義」を掲げている彼らは、たとえ体制内に組み込まれたと見られてもかまわず、組織の参加を通して自らの文学をする場を確保しようするのである。この理念は一部の「満系作家」に批判されているが、その後には「北満文学」の「凋落」から得た教訓——「満州国」で自らの文学をするにはある程度の妥協がやむを得ないという認識があったと見られる。爵青の言動にこうした内面の屈折が読み取れる。

文話会活動の参加、「日系作家」との交遊に前向きな「満系作家」は『明明』（後に『芸文志』）同人か両誌によく寄稿する作家が圧倒的に多かった。一九四〇（康德七）年九月に発表された文話会の役員一覧に文芸部委員に徐古丁、陳辛嘉、映画部委員に趙小松、

新京支部文芸幹事に劉爵青の名が載っているが、いずれも『明明』同人である。『明明』派（以下『芸文志』派）の作家たちは「写印主義」を実践し、創作の面でも大きな成果を上げ、その一部が主に大内隆雄によって翻訳され、日本で紹介されたのである。一方では、新京における『芸文志』派の活躍を横目で見ながらも「郷土文学」の問題、そして彼らの唱える「写印主義」をめぐる論争を起こしたのは山丁である。とくに「写印主義」論争において、奉天で「文選刊行会」を立ち上げ『文選』という雑誌を出した秋蜚らも山丁に同調した。後に山丁や呉郎らが新京で「文叢刊行会」を作って文学活動を展開すると、二つのグループが接近して『文選・文叢』派（以下『文選』派と略す）を形成する。

これまで、日本語が話せ、「日系作家」との交遊も多い『芸文志』派の作家と対照的に、ライバルの立場にある『文選』派の作家たちはほとんど日本語ができず、文話会との接点も「日系作家」との交遊も少なかったことで知られている。秋蜚の「書的故事」を訳した『作文』同人の青木実も秋蜚のことを「日本語を覚えよう」とし、日本人と親しもうとしない作家」とするが、実際の状況は多少違う。文話会は一九四〇年秋に民生部の援助を受けて日本及び国内奥地への会員派遣を行った。国内奥地派遣の会員に王秋蜚の名があるので、秋蜚も文話会の活動に会員として参加していたことが判る。のみならず、彼を始めとする『文選』同人も「日系作家」との交流を試みた。青木実の回想によると、『文選』同人（その大半は、『盛京時報』の編輯部員だった）と『作文』奉天同人との交流は、頭初盛京時報社で座談会をもたれ、二次会は中華飯店に招待された⁽¹⁰⁾という。このような交流会は一回しか開かれなかったが、これをきっかけに「日系作家」も『芸文志』派との文学論争に巻き込まれたのである。

例えば、「第八号転轍機」などの小説を書いた日向伸夫は『満州

『日日新聞』に「満系雑誌と満系文学⁽¹⁾」という一文を寄稿し、『芸文志』派に対する『文選』派の不満と主張を公にした。その一つは「満系作家」の作品の日本語訳についてであり、『芸文志』派の作家の作品が多く翻訳されたのは大内隆雄に負うところが大きく、『文選』同人は彼のような名翻訳者に恵まれていないとしている。この話は恐らく秋蛸らから聞いたのだろう。これに対し、大内隆雄は『新京日日新聞』に「満系文学人の一傾向——日向伸夫に寄す⁽²⁾」という一文を寄稿し、『文選』派と同じ立場にありながら、日向の一文に取り上げられなかった新京の「文叢刊行会」の活動を紹介しつつ、『芸文志』派の作品が多く翻訳された現象に触れて、『芸文志』派との関係及び翻訳作品の選定について釈明した。『芸文志』派と『文選』派の対立は表には文学理念の相違によるものであるが、その裏に前者と「日系作家」との濃密な関係が後者の反感を呼び、対立の種となった一面があると考えられる。このように、中日文学者の交遊と交流は文話会という装置に加えて、「満系作家」間の対立、論争と絡んで展開する一面もある。

三、木崎龍と古丁

文話会を舞台に「日系作家」との交遊を始めた爵青は両者の関係について、「民族が異なり、言葉も違ひ、それに今日の芸文指導要綱の様な理念上の共同目的も出来てゐなかつたから、肝腎の文学の由つてくるところも全然別個のものであつたその当時、お互ひに友情の手を差し伸べ出したことは兎に角感激すべきものであつた」という認識を示す。ここでは、まず注目したいのは「満系文学」と「日系文学」の相違に関する認識である。両者は根本的に異質のものであるが、質の相違を乗り越えた交流があつた、というのは彼の言いたいことである。この事実、むしろ彼が作家論の部分で主張

する「純粋な作家同士の交遊ではな」いことを裏付けることになる。「芸文指導要綱の様な理念上の共同目的」はあくまで当局に押しつけられたもので、これによつて「満系文学」と「日系文学」の異質性が乗り越えられるとはもちろん爵青は思っていない。ただ「文学の由つてくるところも全然別個のもの」という認識は、彼の「日系作家」との交遊の出発点となる。同床異夢の宿命を背負っている作家たちの交遊は、彼が指摘する通り、「純粋な作家同士の交遊ではな」いが、文学を愛する人間同士の交遊であつたに違いない。但し、これは「芸文指導要綱の様な理念上の共同目的も出来てゐなかつた」ときの話、一九四一年三月二三日に政府（弘報処）が「芸文指導要綱」を発表した。これはやがて「日満系作家」の交遊に影を落とすのである。

そうした状況のもとに繰り広げられた「日満系作家」の交遊について、爵青は具体的に次のように書いている。

しかし、この種の交遊の中には、またまことに純粋な、文学の心以外に何ら挾雑物の這入らないものがあつた。例へば、古丁君と故仲賢禮氏の交遊は即ちそれであつた。実に世間にも罕に見られない畏友の仲間であつた。古丁君は幾度となく文学を諦めようとしてゐたところを仲氏はそれを止め、常に畏友としての激励の情を惜しまなかつた。古丁君は今でも故人の友情を思ひ出しては、自分は遂に文学と宿縁を結ばざるを得ず、そして今日の自分をあらしめたのは実に仲氏だつたと感激してゐる。

「文学の心以外に何ら挾雑物の這入らないもの」へのこだわりは逆に、爵青の気にかかることをうかがわせるのである。ここの「挾雑物」とは民族や政治などの要素を指すのだろう。古丁と仲賢禮の交遊において、そのようなものが果たして完全に排除されたのだろうか。というのは、仲賢禮が木崎龍という筆名で文壇で活躍した評論家でありながら、国務院弘報処所管の宣撫月報社に勤めた役人で

もあり、「満州国」の発展を謳歌する「建設の文学」を唱えることで知られている。「暗い」というレッテルが貼られた古丁の作品は彼の唱える「建設の文学」にはほど遠いものだからである。二人の目指す文学像の違いについて後述するが、爵青の伝えた古丁の木崎龍への思いも恐らく本音だったのだろう。一九四二年一月四日、古丁が新京から大連へ病氣療養中の木崎龍を見舞いに行った。満州文芸家協会の派遣とはいえ、このことは側面から二人の友情を物語っている。古丁にとつて、その多くが飲み友達ともいえる「日系作家」の友人のなかで、「畏友」としての木崎龍はやや異色な存在である。例の「挾雑物」に人情と世故も入るとすれば、確かに二人の間に「常人的な附合ひ」を越えるものがあつたといえる。

ところが、古丁を「文学を諦めようとし」た窮地に追い込んだのは皮肉にも交流の窓口となつた文話会そのものである。「日系作家」とも「満系作家」とも交遊があり、「満州国」の文学事情に比較的詳しい内地の評論家浅見淵は、上京した山田清三郎から聞いた話として次のようなことを書き残している。「古丁は不時の災難とは言ひながら家を焼かれてしまつた上に、文話会のさういふ冷淡な態度を見せつけられてすかつり消気込み、当分筆を折つて満州文壇から離れる決心をして、田舎への転勤運動をしきりにしてゐるといふのである。(中略)古丁がさういふ不時の災難に遭遇したのにも拘わらず、古丁もその一員である満州文話会が、それまでどちらかといふと古丁をちやほやしてゐたのに、色々な関係から急に冷淡になつて、別に義捐金も集めて呉れようとはしなかつた」と。ペスト騒ぎで隔離中の古丁の心境を伝えるもので、これによつて文話会に陣取つた「日系作家」たちに翻弄された古丁の姿が浮かび上がってくる。「色々な関係」という曖昧の言葉しか出ていないが、酩酊状態で吐いた「暴言」への反感を含めて、その中に古丁の人と文学への不満が交じつてしていると推察される。しかし、問題となるのは、

「満州文壇から離れ」ようとした古丁を引き留めた木崎龍も、実は古丁の作品に不満をもつ一人である。

かつて木崎龍は「満人作家論・序説」(『満州浪漫』第五巻復刻版・ゆまに書房 二〇〇二、七)で、「古丁さん自身と、古丁さん、が書かれた『原野』と云ふものに対する考えと、そこに一つの非常な距離があるんじゃないかと思ふ。其処に僕は明るさを求めたいと思つてゐる」という『原野』の合評座談会における坂井艶司の発言を紹介するうえで、「それはむしろ、彼が『原野』の作者を愛するのあまり、自らをその作者の立場におき、どうしても救はずにおれぬ気持ち、距離といふ言葉を言せたのだと思ふ」と坂井の代弁をしつつ、「私もさうした距離を感じた」とする。彼を感じた「距離」はもちろん、坂井艶司のそれと変わらないものである。そして、古丁の作品に「距離を感じた」のは在満の「日系作家」のみでなく、浅見淵も『原野』に収められてゐた作品には、満州国人たる意識が殆ど出てゐない」と指摘する。この指摘は坂井艶司や木崎龍の「距離」説と異曲同工の妙がある。「古丁君は幾度となく文学を諦めようとしてゐた」という事実は、このように、常に「満州国」と「距離」が測られてゐることと無関係ではあるまい。

もちろん、「距離」という意識そのものは「挾雑物」になる。但し、「距離」を感じた一人として木崎龍のやり方は坂井艶司や浅見淵と多少異なる。かつて吉野治夫が木崎龍の印象についてこう語つてゐる。「彼はよく、他の人物批評を遠慮なく言つたものだが、その割には敵が少なかつた」と。「満人作家論序説」で展開した古丁論においてもその本領が発揮されてゐるといえる。というのは、まず「距離」の指摘は坂井のことばを援用する形で行い、そして「距離」の生じる原因を主に作家の性格と方法に求めることにより、坂井や浅見のように直接「明るさ」を要求したり、「満州国人たる意識」を問うようなことを避けているからである。このように批評を

できるだけ文学の世界に止めようとするやりかたは、一種の懐柔策といわれたらそこまでであるが、これによって「挾雑物」が若干抑えられたのも事実であり、そこに「畏友」の面目が見て取られる。

とはいうものの、「日系作家」との交遊が最も多く、大東亜文学者大会に三回も出席した古丁でさえ窮地に追い込まれたことは、何よりも「満州国」で文学をすることの難しさを物語っている。とうことを踏まえて古丁を文壇に引き留める木崎龍の動機を考えると、それは単なる文学者同士の友情というような単純なものではないように思う。要するに、中日文学者の交遊は時代状況を切り離して語られるものではない。木崎龍は『原野』について「『満州文話会通信』二六号」で、『原野』の出版をめぐって次のように書いている。

只、この著作集が、文話会員は勿論のこと、すこしでも澤山の人の目にふれ、何らかの形で問題にされ、やがてはより飛躍した段階へ吾々の文学活動をひきあげて行くよすがともなればいいと、心から思ふのである。

作品集『原野』を「吾々の文学活動をひきあげて行くよすが」とするのは一通りの評価だが、同じ文学者として彼は古丁の文学的才能を認めているように思う。問題は作家個人の才能がすべてではないことである。政府系の弘報宣伝機関に勤めた役人として、彼の中に「吾々」（満州国）の文学・文化事業を進展させるには古丁のような「満系作家」が必要だという認識があつたに違いない。右の引用に続いて、彼は「満州の作家といへば、簫軍などもその一人だが、彼も今では中国の作家としての方が有名だし、何よりもまづ、吾々と手を握つて歩みを共にしてくれてゐる古丁氏以下の人々の方が、親しみも深いのである」と指摘する。彼から見れば、「満州国」を脱出し上海で創作活動を続けている簫軍ほど有名ではないが、「満州国」で文話会にも入つて文学活動をしている古丁らは、協力者のみでなく同じ釜の飯を食う仲間である。簫軍との対比にもうか

がわれるように、ここでは、文学そのものより「満州国」が大きなポイントとなる。こうした大局を見る立場に立つ仲間意識が古丁を文壇に引き止めようとする動機につながるのではないかと考える。

と同時に、この仲間意識は「日系作家たちの激発扶掖」を考へる上で見逃せないものである。一方では、「言語の障碍のために吾々の多くがそれらに親しく触ることができず、従つて古丁さんなどと話しても、表面的な堂々巡りばかりで、そこから掘り下げて、つづこんで話し合ふというふ所までゆかずいらだたく物足りない思ひであつた」という感想は、交流の難しさと虚しさをも物語っている。

四、交流における言語力学

爵青はさらに、「此の外に他のお方ともまた色々な記憶に残すべき交遊があつた」として次のように書いている。

文話会の新京進出以来、日満系作家共盛んに作家活動をも始め、そしてその時のやり方には何といつても稍々自由主義的な色彩が残つてゐたから、彼此の交遊交際も自然と活発になり、なにやらお互ひに相助け、相世話する機会も多かつた。吉野治夫、檀一雄、北村謙次郎、長谷川濬、山田清三郎、大内隆雄諸氏との交遊にも実に銘記すべき友情が取交されてゐた。

まず右の引用の中の「自由主義的な色彩」ということばに注目したい。「彼此の交遊交際も自然と活発になり、なにやらお互ひに相助け、相世話する機会も多かつた」のは「その時のやりかた」にはこれが残つていたからである。では、「その時」とはいつなのかと、前後の文脈からすれば、恐らく「芸文指導要綱」が頒布されるまでの間を指すのだろうと思う。要するに、「自由主義的な色彩」が姿を消したのは「今日の芸文指導要綱の様な理念上の共同目的」ができてからであり、これに伴う文壇の変化は文話会が解散さ

れ、その生まれ変わりとして満州文芸家協会、さらに満州芸文連盟が作られたことである。そこまで「彼此の交遊交際」が花を咲かせたのは「自由主義的な色彩が残つてゐた」からである以上、政府による文化統制の強化が「彼此の交遊交際」を妨げるものになるといふ認識に至るのは自然の成り行きである。ここに「自由主義的な色彩」が強調される意味がある。「理念上の共同目的」が押しつけられて以来、却つてこれに手足が縛られ、互いに牽制し合う場面が多くなつたことが想像される。

吉野治夫以下「日系作家」の面々はいずれも「満系作家」との交遊に比較的積極的だつた人物であり、大内隆雄は「満系作家」の作品を数多く翻訳した翻訳者、紹介者として知られているが、挙げられた作家の人数がそう多くないことに留意すべきである。これを裏付けるように、浅見淵は「満州新聞の文化部長をやつてゐる山田清三郎氏とか、以前満州文話会の世話役をやつてゐた吉野治夫君とか、それから北村君や、つひ最近東京へ帰つてきた檀一雄君など、ごく少数の人々を除いては、在満作家とつきあつてゐる人は殆どゐないのではないか」と指摘する。「満州国」の文学事情にかなり詳しい日本の評論家の印象だつたが、「満系」にしても「日系」にしても相手との交遊に積極的な作家に限られているのは事実である。その後、吉野治夫、檀一雄はそれぞれ大連と日本に帰つたが、爵青の回想は「北村氏其他の方々は文話会解消後、文芸家協会が成立してから今日になるまでも、尚昔に優るとも劣らない友情を続けていゝ」と続く。彼が文話会に加入した一九三七（康德四）年から数えて七年の歳月が過ぎた。

一方、相手の北村謙次郎も当時日本にゐる浅見淵への公開書簡で爵青の印象を語つてゐる。浅見淵「大陸と悠久感」に「北村謙次郎君から」と題して次のような証言がある。北村は一旦日本に帰省して新京に戻つたときの体験を次のように書き止めてゐる。「街で

満系作家の爵青君に会」い、「お互ひの近況を知らせ合つた」後、古丁のことを尋ねたら、

僕の質問に答へて、この若い異国の文学者は微笑とともに答へてくれました。

「あひかわらず飲みながら、いつしようにけんめい商売していますよ」

この返答の親しさは、思はず眼を睜りたいほどだつた——そんな風に云つては、兄貴は笑われるでせうか。

いえ、僕はここにも御宿の海岸と満州をつなぐ一線の近き、親しさを感じて嬉しかつたのです。

「御宿の海岸」とは浅見淵が住む千葉県御宿の海岸のこと、ここでは日本の代名詞と考えてよい。右の引用の前に北村は日本から新京に戻つたとき、「何処が異境だ」という「感慨」が一瞬胸を過ぎつた体験を書き記している。こうした体験は無論爵青と無関係ではあるまい。日本でよく見かけられる日常の風景と変わらない、この「異国の文学者」との日本語での会話、そして彼のさりげない応対に「僕」が「親しさ」を覚えたのであり、こうした仲間意識ともいえる親近感とは日本と「満州国」の距離を縮めることになる。もちろん、ここでは、日本語が決定的な意味を持つ。北村の仲間意識は木崎龍と共通するが、「異国の文学者」という言葉は多少問題になる。というのは、「満系作家の爵青君」とあるように、爵青が「満系作家」でもあつたからだ。日本にゐる浅見淵への公開書簡なので、爵青は浅見にとつては前者、北村から見れば後者であり、所々浅見の立場に立つてという解釈はできなくもないが、彼は文中で「異境」という言葉をも使つてゐる。こうした用語の問題は彼が自らの体験を通して語ろうとする「日滿一体化」のテーマに関わつてゐる。「異境」に身を置きつつ「異国」に居る思いをしなないというのは北村の言いたいことで、彼の潜在意識においては新京が「異境」、爵

青が「異国の文学者」だったことは、むしろ「日系作家」の心底に潜んでいる「満州国」への「距離」を垣間見せるのである。

北村は戦後『原野』の出版に触れてこう書いている。「今まで諸方の雑誌で、満系作家の作風はほぼ知っていたつもりであるが、こうして一本になつてみるとあらためてその『暗さ』が注目された。

しかもそれが各作家に共通の筆調だったことは、すでに秋蛩氏が指摘していたところで、満系作家の一特色、反つて珍重すべきだったかもしれないが、当時批評の筆をとつた日系作家や批評家は、いずれもこのことを気にし、『満州』には貧乏と雨と泥濘しかないの、だろるか?』と首をかしげたものだ」と。「日系作家や批評家」の中に彼自身も含まれているはずである。というのは、彼は「満州国」の文壇で一貫して「浪漫精神」を唱え、「建設の文学」を目指す作家の一人として知られているからである。のみならず、彼が「僕らは何でも好きなことを云ふのを許されてゐるのに、何を苦しんで小さく蹶まり、小声で不平のみ洩らすのであらう」と一部の作家の姿勢に疑問を投げ、「僕はこれを、情熱の排除と見る」と批判を加えるところは、「作品集『原野』を通じての暗さ」に分析のメースを入れ、古丁について「パトスの拒否」を指摘する木崎龍の批評を想起させる。そこに「建設の文学」を唱える作家たちの共通点がある。

『原野』は古丁の「原野」を始めとし、小松の「人造絹糸」、遼丁（爵青）の「哈爾濱」、袁犀の「隣三人」など、九人の作家による十二篇の作品を収録したが、その大半が『明明』同人の作品であり、『明明』派の存在はこれによつて一層広く知られたのである。

『原野』の刊行を含めて『明明』派を始めとする「満系作家」の文学活動を、「日系作家」たちがどう見ていたかも興味深い問題である。一例であるが、北村の回想によれば、『明明』派の活躍に受け「た印象を示すものとして、『芸文志』の創刊披露会に次のような一

齣があったという。「宴のひらかれる前に、写真撮影があり、別室で仲よく一緒に写真におさまつたが、このとき杉村氏にすすめられ、古丁君と握手する場面を撮られたりした。両方とも仲よく喧嘩せざるにやれという、氏の老婆心のあらわれたのだらう。が、喧嘩どころか、後には彼らの雑誌経営に関する事務才能の秀れていることと、百枚二百枚と相次ぐ力作奮闘ぶりに、日本側はタジタジとなり、関心しつづけるだけの恰好となつた」と。回想の行間にライバル意識が滲み出ているが、これも中日文学者の交遊を示す一齣となり、とくに古丁らの「事務才能」と「奮闘ぶり」についての感想は印象的である。それはまさに「写印主義」の成果ともいふべきである。

このようなライバル意識は文学作品の翻訳、紹介にも現れている。満映に勤む評論家の王則は交流の現状に触れて「翻訳者の缺乏のために、一年の間に数十篇或ひは十数篇が紹介されているだけである、それにこの数十篇或ひは十数篇は何としても僅か一二人の翻訳者の努力によつて出されてゐる」と問題を指摘する上、「日満文学の交流」を促進するために、もっと多くの「満州文学」（「満系文学」）がより多くの翻訳者によつて翻訳、紹介されることが望ましいとす²⁰。王則の提起した問題に示されるように、作品の翻訳、紹介は中日文学者の交流に直結する問題である。岡田英樹氏は「満州国」における「満系文学」と「日系文学」の翻訳状況を調査して、「日本語への翻訳については、古丁の個人的努力と彼の仲間と共同経営していた芸文書房の積極性がはつきり見てとれるが、その訳業を前記『日本語訳単行本』と比較するとその差異は明らかである。日本人が、在満中国人との交流を目的として、その創作を翻訳しているのに対して、中国人の側は同時期の日本人の文学には冷淡である」と結論付ける。この結論は結果的に王則の主張を否定することになる。要するに、岡田氏から見れば、もっと翻訳されなければならぬのは「日本人の文学」である。

確かに日本語に翻訳された「満系作家」の作品が中国語に翻訳された「日系作家」の作品より多いのは事実である。とはいえ、翻訳作品の数量の差のみで「中国人の側は同時期の日本人の文学には冷淡である」という結論を出すのはやや短絡的だと思う。実は問題となる事象の背後に次のような事情がある。

中でも彼ら満人作家が、日本文学に示した異常な関心の程度を知ることができる。筆者らも創刊号から寄贈を受けていたが、せつかくの力作が、半分も満足に読了し得ないのは、(他の日系作家も、いずれも筆者と同じ文盲である)逆に彼ら満系作家が、いずれも自由に日文をこなすのに比べ、些か恥じ入らねばならぬことであつた。彼らは小学校教育から日本語を必修科目にされるので、日本文を読み聞きするのに不自由しないといつてしまえばそれきりだが、ことさら民族協和の文芸を標榜する筆者らが、自由に中国文をこなせないということは何としても残念で、「この機会に中国白話文の勉強を」と思い立ちながら、満州滞在中、遂にその事が成就せずに終つたのは怠慢と譏られていいことである。

北村謙次郎が『芸文志』を読んで感じたことであるが、この反省を込めた回想によって何故中国語に翻訳された「日系作家」の作品が少なかったかという疑問が解かれる。主な原因は「満系作家」を始めとする「満人」の日本語力にある。「満州国」では、日本語の国語化に伴って「小学校教育から日本語を必修科目にされるので」、「満系作家」のみでなく、学校教育を受けた若者は大体「自由に日文をこなす」のである。要するに、文学作品を消費する者の中に「日系作家」の作品を原文で読める人が多かったからである。「日満文学の交流」を語る王則の発言はこのような事実を踏まえているわけである。従って、「日系作家」がほとんど中国語の「文盲」である状況が変わらない限りでは、むしろ彼の主張する「満系文学」翻訳の拡大は切実な課題となり、この問題が解決されなければ「日

満文学の交流」も進展することはないはずである。

終わりに

以上の考察をまとめていうと、まず文話会は「日系作家」と「満系作家」の交遊と交流を考える上で一つのキーワードとなる。「北満文学」の「凋落」を目の当たりにしながら、「土地に粘着する作家たち」は「日系作家たちの激発扶掖を受け」て文学活動を続けることとなるが、彼らのうち、文話会という舞台を通して「日系作家」との交遊を積極的にする作家もいれば、文話会活動への参加、「日系作家」との交遊に消極的な作家もいたことは実状であり、「日系作家」及び文話会との関係を軸に「満系作家」の文学活動が分かれていたともいえる。日本人の資金援助を受けて雑誌を出した古丁ら『明明』派(後の『芸文志』派)の作家たちはもちろん前者、彼らの文学理念をめぐって論争を起こした山丁や秋蛭を始めとする『文選』派の作家たちはどちらかというと後者に分類される。とはいうものの、『文選』派は「日系作家」と全く関係をもたなかったというわけではない。彼らも文話会の活動に参加したり、『作文』同人を中心に「日系作家」と交流したりする一面があり、つまり「身近な日系作家たちの激発扶掖」を排斥しなかったのだ。それどころか、「身近な日系作家たちの激発扶掖」を利用したとも捉えられる活動をしたのである。文学論争を伴う『芸文志』派と『文選』派の対立に中日文学者の交流が深く関わっていることは、それが一方的な「激発扶掖」の関係を越え、より複雑な構造をもつものになることを意味する。一方では、「満系作家」内部の対立は「日系文学」における新京イデオロギー対大連イデオロギーの構図を想起させる。

進んで文壇の表舞台に出た『明明』派の動機は彼らの唱える「写

印主義」にあると思われる。これは究極において、文学観や方法論の確立より、作品を書く（写）ことと発表する（印）ことによつて文学をする場を確保するのを優先すべきだという考え方である。この理念は一部の「満系作家」から批判されているが、その背後に「満州国」という特殊な環境の中で自らの文学をするにはある程度の妥協と特別な知恵が必要であるという認識があり、彼らは文学理念の議論より作品を書く、そのために利用できるものはすべて利用する、というスタンスを最後まで崩さなかった。この意味で、文話会活動への参加も「日系作家」との交遊も、究極的には目的達成のための手段だったともいえる。その上、「満州文学」の方向として「日系作家」の打ち出した「建国文学」、「協和文学」の理念を共有することができなかった、少なくとも仲間の一人としてそれに進んで取り組もうとする自覚が欠けたのも事実である。だから、「日系作家」から「暗い」という批判と共に、「満州国人たる意識」が問われたり、「明るさ」が求められたわけである。

一方では、「満系作家」の作品の「暗さ」に違和感を覚えながらも、多くの「日系作家」は木崎龍が指摘したように、「満系作家」を「吾々と手を握つて歩みを共にしてくれてゐる」仲間として「激発扶掖」していた。但し、この仲間意識は主として「満州国」のためという政治的発想に基づくものであり、なかに些か作家同士の連帯感を交えていることを否めないが、共通の文学観と文学像を共有する作家の間に自然発生的に形成されたものではない。従つて、木崎龍と古丁のような「純粹」なる交遊があつたものの、やはりそうした仲間意識に基づく「激発扶掖」の域を出ておらず、交遊の実態は「半ば常人的な附合ひ」という一言に尽きるといつてもいい。なお、日満作家の交遊が「活発になつた」のは新京に文話会の支部が出来た後で、そこから「芸文指導要綱」が発表されるまでの三年間は、爵青から見れば、「自由主義的な色彩が残つてゐた」時期と

して交流の黄金期にあたる。

両者の交遊と交流は最後まで政治と民族の垣根を越えることができなかつたが、さまざまな形で展開したのは事実であり、そのひとつは作品の翻訳、紹介である。確かに多くの「満系作家」の作品が日本語に翻訳されたに引きかえ、中国語に翻訳された「日系作家」の作品は少なかつた。こうした現象を引き起こす主な原因は「満系作家」の態度というより、「満州国」の言語教育にあると考えられる。要するに、政府による日本語教育の普及により、「日系作家」の作品を日本語で読める「満人」が増えたからである。このことは、むしろ「日系文学」が「満系文学」に対して言語的にも優位に立ち、両者の交渉が対等的に行われるはずがないことを端的に示すのである。

注

- (1) 西原和海『満州国における日中文学者の交流』（『アジア遊学』第四四号、二〇〇二、一〇）九三〜一〇一頁。
- (2) 拙稿「同床異夢の『満州文学』(一)——『満系文学』側の主張から——」（『崇城大学研究報告』第三三卷第一号、平成二〇、三）五〜一三頁。「同床異夢の『満州文学』(二)——『満系文学』の『暗さ』を中心——」（同第三四卷第一号、平成二一、三）二七〜三四頁より再引用。三七九頁。
- (3) 大内隆雄『満州文学二十年』（国民画報社 康徳一一、一〇、一）
- (4) 浅見淵『満州芸文連盟について』（初出『読売報知』昭和一七、八『満州文化記』満州書籍配給株式会社 康徳一〇、一〇所収）二八九〜二九〇頁。
- (5) (4) と同じ。
- (6) 北村謙次郎『北辺慕情記』（大学書房一九六〇、九、一）。一三三頁。

- (7) (6)と同じ。一二四頁。
- (8) 劉曉麗「偽満州国作家爵青資料考案」(『上海師範大学学报(哲学社会科学版)』第三六卷第三期 二〇〇五、五 原文中国語、日本語訳は作者) 五九〜六六頁。
- (9) 青木実「旅順」(『旅順・南京の旅』作文社 一九八二、二二、一) 一八頁。但し、その後、秋蚩からの手紙を受けた作者が発言の一部を修正した。詳細は注(10)を参照。
- (10) 青木実「二人の友人」(『外地・内地 拾遺』作文社 一九九四、五、二〇) 二二八頁。
- (11)、(12) 原文未見。李春燕主編『東北文学綜論』(吉林文史出版社 一九九七、一〇)による。二九九〜三〇〇頁。
- (13) 浅見淵「満人作家会見記」(初出『新潮』昭和一六、四 『満州文化記』(満州書籍配給株式会社 康德一〇、一〇所収) 一八四〜一八五頁。
- (14) 浅見淵「満人文学について」(早大文学講義 『満州文化記』満州書籍配給株式会社 康德一〇、一〇所収) 三〇九頁。
- (15) 吉野治夫「木崎龍の死」(『芸文』第二卷第四号、康德一〇、四) 一六一頁。
- (16) 浅見淵「満州文学について」(初出『月刊文章』昭和一七、一一 『満州文化記』満州書籍配給株式会社 康德一〇、一〇所収) 一八九〜一九〇頁。
- (17) 浅見淵「大陸と悠久感」(初出『芸文』昭和一七、七 『満州文化記』満州書籍配給株式会社 康德一〇、一〇所収) 三三七頁。
- (18) (6)と同じ。一四七頁。
- (19) 北村謙次郎「探究と観照」(『満州浪漫』第5巻復刻版 ゆまに書房 二〇〇二、七、一〇) 七二頁。
- (20) (6)と同じ。一二二〜一二三頁。
- (21) 王則「満日文学交流雑談」(『満州浪漫』第5巻復刻版 ゆまに書房 二〇〇二、七、一〇 大内隆雄訳) 八七〜九三頁。
- (22) 岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——『満州国』における翻訳の実態」(西原和海、川俣優編『満州国の文化——中国東北のひとりの時代』せらび書房 二〇〇五、三) 七七頁。
- (23) (6)と同じ。一二〇頁。